

## 「木場の窓から見えるもの(元外交官の視点)」

弊社理事 石井正文(元駐インドネシア日本国大使)による  
気になる海外情報を原則第2、第4木曜日に配信しています。

### 第84回: インドネシアの「迷走?」(プラボウォ訪中・訪米)

2024年11月28日配信

- プラボウォ新インドネシア大統領は、10月20日に大統領に就任した(元々は、新首都で就任式をやる発表されていたが、海外からの賓客が多いことなども 考慮したのだろうか、結局、従来通り、ジャカルタにある議会内で実施した。)
- 同大統領は、前任のジョコウィ大統領に比べ、外交に対する関心が高い。
  - ・ 異例だが、大統領当選後就任「前」の本年3月31日から4月3日まで中国と日本を訪問。
  - ・ 大統領就任「後」最初の外遊先としては、中国と米国を選択。
    - \* 11月9日には習近平主席と会談し英文で4000語を超える包括的共同声明を発表。
    - \* その後APEC,G20首脳会談出席に向かう途上に米国を訪問し、11月12日にはバイデン大統領と会談すると共に、トランプ次期大統領と電話会談を行い、その様子を動画で公開した。
- 一方、インドネシアは、10月24日、ロシア・カザンで開催されたBRICSプラス首脳会議にスギオノ外相を大統領特使として派遣し、同外相は、同日BRICS加盟の意向を表明した。
  - ・ ASEAN諸国の中では、これに先立ち、
    - \* 5月末にはタイがブリックス加盟申請を閣議決定し、
    - \* 7月末にはマレーシアが加盟申請を公表した。
  - ・ インドネシアは、昨年、ブリックスに招請されたのにこれを拒否し、OECDへの加盟を選択したが、それが再度ブリックス加盟を明したのは、インドネシア自身とASEAN諸国の今後を見る上でそれなりに影響が大きい注目すべき出来事だ。
    - \* タイとマレーシアを含めて、これらの諸国は、中ロが主導するブリックスへの加盟が何を意味するのか、良く分かっているはずである。
  - ・ これらの申請は、2つの意味で注意を要する。
    - \* 第一に、トランプであるか否かに関わらず、長期的な趨勢として米国の対外関与の意思が低下しているとの認識が影響しているのではなかろうか。米国から守ってもらえないとの認識と、対中傾斜をしても米国は最早怖くないという認識が合いまったものと言える。

\* 同様のことは、サウジアラビアの対イラン接近の背景にもあると言えるだろう。

フーシー派のサウジ国内の製油所攻撃の際に米国が本気で守ってくれず、米国が湾岸から引こうとしているとの認識を持ったサウジは、他の守護者が居ない以上(トランプ第一次政権が進めたアブラハム合意による湾岸諸国とイスラエルの関係改善を通じた「イスラエルによる代替」は、その後のガザ紛争の国内世論への影響を待つまでもなくサウジにとっては受け入れ難いはずだ。)、最大の脅威であるイランとの緊張緩和が不可避と考えたのだろう。同様の理由で、口中接近もしている。

\* もう一つの問題は、ASEANの盟主であるインドネシアは、本来、ASEANに分断を持ち込み得るタイ、マレーシアのブリックス加盟を問題視する立場にあるはずだが、その当人がASEAN分断に繋がりにかねない動きをしたことである。

\* 筆者は従来から、公式には大国のどちらも選ばないという立場をとっている東南アジア諸国は、日本の外務省による世論調査の結果(将来、中国より日本を頼る国(尼、比、越)と、政権により日中間で揺れ動く国(タイ、マレーシアはこのカテゴリーに属する。))と、中国依存が明確な小国、更に、米中双方に張っている例外国(星)に分かれている。)を見れば、既に心の中では選択を決めており、更には、今後米中そしていずれインドによる影響力を巡る競争に晒される中で、分裂は益々顕在化すると主張してきたが、正にその号砲が鳴った、ともいえるような状況だ。

\* このような状況下で、米国の国際問題からの撤退の中で、日本他の同志国・同盟国は紛争解決の責任を一層担う必要があり、そのためには多数派形成(グローバル・サウスの友人の増加)が求められているが、日本は同時に、引き続きASEAN一体性支持を掲げている。以上を踏まえ、日本が今後どのように立ち回っていくのかは、良く考える必要があるだろう。

■ 次いで、11月9日、プラボウオ訪中の際に発表された尼中共同声明の問題を指摘したい。

・この共同声明は英文で4500語弱・11ページに及ぶ包括的なもので、包括的戦略パートナーシップのこれまでの4つの柱(政治、経済、人的交流、海洋協力)に加え、安全保障を5本目の柱と追加指定し、来年2+2会合開催を表明している。

・内容的には美辞麗句の部分も多いが、一番問題なのは、海洋協力の項のこの部分だ。

\* 「両国は双方の主張が重複する場所で共同開発をするとの重要な共通理解に達した。」

(The two sides reached important common understanding on joint development in areas of overlapping claims...)

\* 共同開発自体は緊張緩和のために良く取られる手法で、望ましくは無いにせよ、死活的問題ではない。

\* 問題は、「双方の主張が重複している」ということを前提として認めている、換言すれば、中国側の九断線の主張を受け入れていることだ。

- \* これは、2016年7月に、9断線には国際法上の根拠がないとの判決を海洋法条約に基づく中国との仲裁裁判で勝ち取り、最近も南沙諸島で中国側から虐められているフィリピンの立場に冷や水をかけるものだし、仲裁裁判の結果自体を貶めるものである。
- \* 直後にインドネシア外務省は、共同開発実施は、中国の9断線の主張を認めるものではない、との立場を表明しており、この部分の持つ問題を緩和しようとしているようだが、それはそうとしても、共同声明の内容自体は9断線の主張を認めたものと読まれることは不可避だ。
- ・ そもそも、インドネシア外務省は、共同声明の当該箇所について削除すべしと主張したが、プラボウォから無視された、または、そもそも共同声明を見せてもらえていなかった（米側関係者の内話）との話がある。
- \* 一方、インドネシアと関係のある筆者の旧友にたまたま訪米中に直接確認したところによれば、米側は、この問題を認識しつつも、プラボウォ訪米の際には、強く非難することは敢えて避けたとのことだった。
- \* 理由は、そうすれば、プラボウォの顔をつぶし米尼関係に悪影響が及び、対中接近がより進み、ますますプラボウォが外務省等の官僚組織を無視して暴走する可能性があるとの判断があるかららしい（米国にしては、相当抑制的な対応だ。）。
- \* もちろん、訪中の後に訪米があった結果、インドネシア側は、共同声明が持つ各種問題について米側に説明せざるを得なくなり、米側から問題点を静かに直接指摘する機会にもなったので良かった、との認識ではあった。
- ・ なお、その他の部分では、「中華人民共和国政府が中国を代表する唯一の政府であることに加え、台湾が中国の不可分の一部であるとの、総会決議第2758号に沿った従来からのインドネシア政府の一貫した一つの中国の立場を再度表明し、中国政府による平和的国家再統一の努力を支持し、更に、新疆ウイグルの問題は、中国の内政問題だと明言している。双方とも望ましくはないが、新しいことではない。
- \* ただ、新疆ウイグルの問題を巡ってはインドネシア国内のイスラム団体には強い反発があるので、若干のリパーカッションがあり得るだろう。
- \* 台湾については、この立場に基づけば、中国の台湾武力侵攻をインドネシアが非難するかどうかは不明だが、
- \* その結果として生じるインドネシア国内における国際的代替シーレーンの自由で安全な航行維持にインドネシアが協力することは可能なはずであるので、引き続きその点での働きかけは進めていくべきだろう。

- 一方、訪中前には、重要武器システムは中国から購入しないとのこれまでのタブーを破り、インドネシアが、中国が売却を希望しているフリゲート艦と潜水艦を購入するのではないかと、との憶測が報じられていたが、今のところそれを確認する情報はない。今後とも注視の要はあるだろう。
- ・ ただ、首脳会合にあわせて、インドネシア商工会議所(KADIN)中国委員会は「インドネシア・中国ビジネスフォーラム2024」を開催し、その場で配車サービスなどを運営するインドネシアの大手企業「GoTo」と中国のテンセント、アリババグループとの協力覚書を始めとし、先端技術、再生可能エネルギー、健康、下流化（サプライチェーンの川下を含めた高付加価値化）、食料安全保障、金融の分野で合計20件、総額100億7,000万ドル相当の協力覚書が締結されたとのインドネシア側の報道はある。

■以上を踏まえて日本として取るべき道は、正攻法。

- ・即ち、武器取引を含め、同国との2国間関係を着実に強化することに加え、
- ・インドネシアを一層組織的な形で当方に近づくように取り込むことだろう。
- ・インドがブリックスとクアッドの双方に入っているのは、ベストではないが、良いことである。
- ・この共同声明でも、インドネシアの早期のブリックス加盟への中国の支持は明言されている。  
それに余り遅れないタイミングで、既存のインド・インドネシア・豪州の三か国会合に日本が参加し、  
いわばアジア版クアッドを作るということを本気で進める必要があるだろう。

■なお、グッドニュースは、トランプとプラボウォのケミストリーは良いということだろう。

- ・二人とも比較的高齢だが(プラボウォ; 73歳。他の大統領候補2人は50代半ばだった。トランプ; 78歳)、  
強面(ストロングマン)を売りにしている。
- ・権威主義的発言と行動が目立つが、自由で公正な選挙で選出されている。
- ・公開された電話会談から見る限り、トランプは、プラボウォを気に入ったのではないか。  
少なくともインドネシアという国に、英語がペラペラの大統領が居ると言うことは頭に入っただろう。

■また、筆者が接触したプラボウォ国防大臣は、ともかく日本と「武士道(Bushi-do)」が好きで、米国も大好きで、  
一方、中国を戦略的挑戦と見ている人物だ。日本は、中国の動きを良くインドネシア側に伝え、米国と  
インドネシアの接触が増えるように知恵を絞ることも重要だ。

以上

りそな総合研究所 理事 石井正文